

実践編

ワークシートを使った園内研修で信頼関係を育む援助を共有する

エピソード記録を活用したワークシートを使って、子どもと保育者、また子ども同士の信頼関係を育む援助について考えてみましょう。

監修／東京成徳大学子ども学部 神長美津子

保育の多様な「層」をていねいに理解して援助の質を高める

信頼関係を育む場面を園内研修で共有

園内研修の特長は、目の前の子どもの実態に即して園や保育者が抱える課題に向き合えることにあります。それぞれの保育者が園外研修で持ち寄った知識を共有する場としても効果的です。

2011年春号では、子どもの様子を表す「4コマイラスト付きワークシート」を利用した園内研修について紹介しました。ワークシートの長所は、記入する時間を設けることで保育者が自分の考えを整理できる、記入後に話し合うために意見交換が活発になる、などがあります。

今号では、「学びの芽生え」のベースとなる「信頼関係」を生み出すにはどのような援助が必要であるかを園全体で共有するために、ワークシートを活用します。

10ページ以降に掲載している2種類のワークシートは、いずれも保育者が「子どもとの信頼関係にかかわる」と感じて記録した実際の保育の場面がもとになっています。参加者がワークシートを読み、各々の考

えを記入し、話し合うというのが大まかな流れです。基本的にファシリテーターとなる先生がリードして話し合いを膨らませていきます。

エピソード記録を活用したワークシート型研修

エピソードを用いたワークシート型研修のよさについて、東京成徳大学子ども学部の神長美津子先生は次のように話します。

「ビデオは時間の流れなどが分かりやすいですが、ズームにしてしまうと子どもの周囲の状況が分かりにくいこと、写真は瞬間の様子は分かりやすいのですが、背景となる状況が伝わりにくいことなど、記録方法には一長一短があります。エピソード記録の場合、保育者が思いや背景を書き込めるため深い部分まで突っ込んだ話し合いがしやすいというよさがあります」

保育は、それぞれの場面が、子どもの個性や思い、保育者の考え、友だちとの関係性……など、多様な「層」が絡み合っていて成り立っています。こうした層をていねいに理解するうえで、エピソード記録をベースとしたワークシートは役立つと



言います。
「ひとつの場面を切り取って、その場面がどのような層によって構成されているかを話し合うことで、ふだん、無意識に取り組んでいることが意識化されて、保育者の資質の向上をもたらしますし、園としての保育方針の共有にもつながるでしょう」（神長先生）

エピソード記録を用いたワークシートをそれぞれの園で作成する場合は、参加者が場面を共有しやすいように、できるだけ保育者や子どもの具体的な言葉や動き、表情などを描写するとよいでしょう。

研修の進め方例

所要時間 45～60分

1 研修についての説明
5分
ファシリテーターが研修の流れとねらいを説明します。ワークシートの概要とともに、POINT①～④に沿って自分の考えをまとめることを伝えます。

2 ワークシート記入
10～15分
個々の保育者がワークシートに記入します。「正解はない」「思ったことは何でも書いてよい」などと伝えると、自由な考えを書きやすくなるでしょう。

3 ワークシートをもとにした話し合い
20～30分
記入内容をもとに話し合います。順番に発表するよりも、ひとつの考えを広げたり、反対の考えと比較したりすると、話し合いが深まりやすくなります。

4 まとめ
10分
研修を通して学んだことや感じたことを発表し合います。

ファシリテーションのポイント

- >>> **すべての意見を尊重し、受け入れる**
すべての意見を尊重することで発言しやすい雰囲気になります。例えば、若い保育者が遠慮していたら、「〇〇さんはどうかな」と発言の機会をつくり、「そういう考え方もあるね」などと受け入れる姿勢を示しましょう。
- >>> **自分の意見を述べ過ぎない**
ファシリテーターが「この場面は、こう考えるべき」などと意見を述べ過ぎると、参加者がその考え方に影響されてしまうことがあります。ファシリテーターは、話し合いの調整役に徹しましょう。

- >>> **似ている場面の経験や異なる意見を聞いてみる**
話し合いが停滞したら、「似ている場面を経験したことはあるか」「異なる考え方をした人はいるか」「自分が子どもの立場だったらどう感じるか」といった投げかけによって、参加者の視点を変えてみるとよいでしょう。
- >>> **結論や正解を出す必要はない**
「今日の話合いをもとに、自分の保育を見つめ直し、明日からの実践に生かしてください」といった言葉で締めくくるとよいでしょう。

「信頼関係を育む援助」

園内研修用ワークシート

1

管を曲げて水を流したいのに、うまくいかない……

名前：

年齢と時期	場面
5歳児・6月	砂場

あらすじ

年長の男児4人が砂場で「ダム工事」をしています。いろいろとアイデアを出し合いますが、なかなかうまくいきません。

年 長の男児4人が、砂場にプラスチック製の管で水を流してダム工事ごっこをしています。ひとりが「こっちの大きな穴にも水を流そう」と言うと、みんなが賛同。ただ、その穴に水を流し込むには、管を曲げてつなげる必要があります。「管をビニール袋でつなごう」「段ボールを使う？」と考えを出し合いますが、うまくつながりません。



し ばらく見ていた担任が「何か困ってるの？」と聞くと、「いろいろ試したけど、うまくいかない」と答えます。担任は「すぐに先生に助けてって、言いに来なくなったね。みんなで相談しながら、いろいろ試しているんだね。先生、いいものを知ってるんだ」と言って、管をつなぐジョイントを持ってきて、「これならどうかな？」と渡します。4人は管をつなげることに成功。「こんな風にしたかったんだ！」「先生、いいもの知ってるね！ありがとう」と大喜びでした。



POINT 1 >>> グループ内での子ども同士の関わり合いの状況はどうでしょうか。

記入欄：

POINT 2 >>> 保育者のどういう援助が信頼感につながったと考えますか。

記入欄：

POINT 3 >>> 保育者の援助のタイミングはどうでしょうか。あなたならどうしますか。

記入欄：

ファシリテーター向け

園内研修用ワークシート

1

「管を曲げて水を流したいのに、うまくいかない……」

研修の進め方と解説

適切なタイミングで教材を提示し、めあてが実現できるようにする

この場面では子ども同士、そして子どもと保育者の二つの面から信頼関係を育むことがポイントになります。子どもたちがアイデアを出し合い試行錯誤して目標に近づいていく遊びの中で、互いに協力することを学ぶことで、グループで物事を進める「協同」関係の基礎が身に付いていき、信頼関係にもつながっていきます。しかし、どうしても子どもたちだけでは実現できない場合は、保育者の出番となります。このとき、適切なタイミングで入り、それまでの子どもたちの努力を認めることが信頼関係の第一歩となります。

POINT 1 >>> グループ内での子ども同士の関わり合いの状況はどうでしょうか。

「ダム工事」はうまくいきませんが、アイデアを出し合い、目標に向かっていくという点では、子どもたちの間に関係性が育っていると言えるでしょう。さらに、試行錯誤の過程で、

徐々に目標に近づいている様子が見られます。学び合いの姿が見られている点では、子どもたちの間に信頼関係が育ちつつあることもうかがえます。

POINT 2 >>> 保育者のどういう援助が信頼感につながったと考えますか。

子どもたちが知らなかったジョイントを保育者が渡すことで、「ダム工事」は完成しました。あまり早いタイミングで渡してしまうと、子どもたちの試行錯誤の機会を奪ってしまいかねませんが、適切なタイミングで教材や方法を提示することで、「助けになってくれた」「よい方法を教えてくれた」といった保育者に対する信頼感につながると考えてよいでしょう。

目標を実現させるには他の方法もあったかもしれませんが、この保育者は適切な道具を提示することで成功に導きました。声かけなどの精神的な援助だけではなく、教材をはじめとした必要な物を提示することも信頼関係の構築につながる例と言えます。

POINT 3 >>> 保育者の援助のタイミングはどうでしょうか。あなたならどうしますか。

保育者は、「何か困ってるの？」と話しかけましたが、この入り方は話し合いの余地があるかもしれません。それまでの成果を見て、「すごい、こんなアイデアもあるんだね」「でも、ここだけが残念だね」などと、一旦、子どもたちのつくりあげたものを褒めれば、スムーズに「仲間」として入ることができたかもしれません。子どもたちだけでは解決が難しい場

面に保育者が援助をする際、タイミングや入り方によっては、「先生に聞いたほうが楽だ」という意識をもたせてしまいかねません。それではなかなか意欲の喚起や信頼関係の構築はできません。どのような援助が子どもたちとの真の信頼関係に結びついていくか、みなさんで話し合ってください。

「信頼関係を育む援助」

園内研修用ワークシート

2

ソウタ君は、もう絶対、仲間に入れない！

名前：

年齢と時期
5歳児・5月

場面
鳥小屋・砂場

あらすじ

年長の男児4人のグループ(タカシ、ソウタ、サトシ、アキラ)は、小鳥の世話の当番をすることになりました。しかし、ソウタは遊んでいて、やろうとしません。すると、タカシが怒り出しました。

タカシが「鳥かごの掃除をしよう」と言いますが、ソウタは砂場で遊んでいます。ソウタ以外の3人がその場を離れると、ソウタが追いかけてきてタカシを叩きました。タカシは「ソウタ君はもう絶対仲間に入れない」と怒り、サトシも同意します。アキラは困った様子です。ソウタが黙ってうつむいているうちに、3人は鳥かごの方に行ってしまう。ソウタはそばにいた担任の顔を見ます。

担任が「みんなとお話をしたほうがいいんじゃないの」と声を掛けると、ソウタは3人のほうに行き「今は砂遊びがやりたかった」と言いました。タカシに「それなら今日は当番をやらなくていい！」と言われたソウタは、泣きそうな顔で担任に「僕は仲間に入れなくなった」と訴えました。担任が「仲間に入りたいの？」とたずねると、ソウタは「うん」と言い、泣き始めました。



困っている担任にアキラが何か言いたそうにやってきました。「アキラ君、何か言いたいことあるの？」と言うと、「あれ」と鳥かごの下の受け皿を指差します。担任が「あれを洗う人、誰もいないのかな？」と聞くと、「うん」という返事。ソウタに「どうする？」と聞くと、「僕がやる」と言うので、担任はアキラに聞いてみるように促します。ソウタが「やってもいい？」とアキラに聞くと「いいよ」という答えが返ってきました。ソウタとアキラは皆のところに行きました。

POINT 1 >>> グループ内の一人ひとりの育ちと子ども同士の関係性の育ちについて考えてみましょう。

記入欄：

POINT 2 >>> 信頼関係を育む援助としてよい点、改善点を考えてみましょう。

記入欄：

POINT 3 >>> あなたならどのような援助をしますか。

記入欄：

ファシリテーター向け

園内研修用ワークシート

2

「ソウタ君は、もう絶対、仲間に入れない！」

研修の進め方と解説

子ども同士のコミュニケーションを支援する

子ども同士の信頼関係を育てることは、学びの芽生えの土台として不可欠です。しかし、保育者が言葉で指導するだけでは、なかなか子どもの関係性は育ちません。一人ひとりの育ちの差を十分に考慮しながら、

仲間の中での立場や役割を意識できるように促しましょう。そのために、保育者がうまく仲介して「子どもの言葉」で伝えていくのは有効な援助の方法です。この場面でも、グループの中で一

人だけ当番活動に協力的ではない子どもがいます。衝突が起こりますが、無理に参加をさせるのではなく、子ども自身に協力の必要性をどう気づかせるようにしていくかがポイントとなります。

POINT 1 >>> グループ内の一人ひとりの育ちと子ども同士の関係性の育ちについて考えてみましょう。

一人ひとりの育ちに差があることに、まず目を向けるべきでしょう。4人に同じように接するのではなく、自分の気持ちだけで動いているソウタが、周囲と協力することの大切さに気づくようにすることが重要な場面です。ソウタがタカシを叩く場面を見ると、ソウタはどのようにして自分の遊びを中断

しなければいけないかを理解できていない様子です。タカシ、アキラ、サトシの3人の中には、友だちとの関係性の中で動かなければならないという意識が育っていますが、ソウタはまだ十分に自分の立場を理解できていないようです。

POINT 2 >>> 信頼関係を育む援助としてよい点、改善点を考えてみましょう。

保育者は、この事例の中ではソウタを中心にフォローしています。結果としていっしょに当番活動をすることができましたが、ソウタは本当にみんなで協力することの必要性に気づいているでしょうか。タカシやアキラの訴えをうまくソウタに伝えて、「みんなでやりたいんだよね」などと声をかければ、

ソウタの中に気持ちの変化を起こすことができたかもしれません。また、ソウタと衝突したタカシへのフォローがないため、タカシの心の中にわだかまりが残ってしまう可能性もあるでしょう。

POINT 3 >>> あなたならどのような援助をしますか。

この場面でポイントとなる援助は、「ソウタ君、どうする？」という保育者の言葉にありそうです。この言葉によってソウタは当番活動に参加することになりましたが、心配して声をかけに来たアキラの気持ちがソウタに伝わったかどうかは疑問が残ります。子どもたちの間に信頼関係を育てていくには、

保育者の指導ではなく、グループの中での自分の立場や役割を理解し参加していくことが何より重要になります。そのためには、保育者が場を支えるのではなく、4人を集めてソウタの役割を子どもたちの言葉で伝えるという方法を取ってもよかったですかもしれません。